

バンチ氏病手術後ノ遠隔成績ニ就テ

千葉醫科大學第二外科教室(主任 瀨尾教授)

松 谷 正 宗

【内容抄録】

著者ハ脾臓剝出チ行ヘルバンチ氏病七例中、第二期ノ一例ハ術後二日ニテ死亡セルモ、他ノ六例ハ尙健存シ、長キハ七年一ヶ月、短キハ六ヶ月ヲ經過セル例症ヲ得タリ。之等ヲ時期的ニ區分スレバ、三例ハ第二期ノ終リ、他ノ三例ハ第三期ニ屬スルヲ認メタリ。尙、術後ノ變化トシテ全身狀態ハ凡テ恢復シ、營養モ發病以前ノ健康狀態トナリ、自覺的ニハ何等障礙ナク充分以前ノ職業ニ從事シテ勞働シ得、他覺的ニモ一例モ腹水鼓腸ノ再發セルモノナク、又、他ノ造血臓器ニ異常ヲ認メズ。然レドモ本病ノ進行セル時期ニ屢々見ル所ノ皮膚、結膜特ニ軟口蓋ノ淡黃着色ハ程度ハ減少セルモ全ク消失スルニ至ラズ、唯貧血ノ恢復ニ伴フ健康血色ニヨリ殆ンド識別シ得ラレズ。

血液ノ變化トシテハ、赤血球數ハ術後稍低下スルモ、直ニ一週性ニ上昇シ、約二ヶ月後ハ正常或ハ稍々高キ價ニ止マルニ反シ、血色素量ハ輕度ニ上昇スルノミニシテ、略々二ヶ月後ハ漸次低下シ始メ、其ノ後ハ術前ニ比シ毎常減少セルモ略々一定ノ狀態ニ止ツテ増減ナキニ至ル故血色素指數ハ漸次低下セリ。白血球數ハ術直後著明ナル反應性増加アルモ、二週後ニハ略々常態ニ復シ以後一定トナル。而シテ其ノ百分率就中、中性多型核白血球ト淋巴球トノ關係ニ就テハ前者ハ術後一過性ニ高率トナルモ六週後ハ低キ%ヲ示シ、之ニ反シ淋巴球ハ此ノ時期ニ最モ高キ%ヲ呈スルモ、其ノ後ハ互ニ漸次生理的比率ニ近ヅキ、術後十數週後ニハ略々常態ノ比トナル。大單核及ビ移行型細胞、エオチン嗜好性細胞ハ共ニ術後三—六週ニ最高率ヲ示スモ、漸次正常ニ復歸シ、肥胖細胞ニハ殆ンド變化ヲ見ズ。更ニ赤血球ノ變性及ビ變型ハ消失シ、其ノ抵抗力ハ増大シ、更ニ血小板數ハ増加シ、血液凝固時間ハ術後三—六週ニテ正常ニ復セリ。

肝臓果糖耐カ試驗ハ術後長期間陽性ナルモノ多ク、又尿中ウロビリリン及ビウロビリノーゲンヲ長時間尙證明シ得タルハ、未ダ肝臓機能ノ正常ニ復歸セザルコトヲ示スモノニシテ、既ニ基質的ニ深ク變化セル肝臓ニ對シテハ術ナシト雖モ、術後腹水、鼓腸ノ再發ナク、黃疸増悪セザルコト及ビ出血性傾向ヲ飲如スル等ノ事實ヨリ、肝臓病變ノ度ハ更ニ増悪セザルモノノ如シ。斯クシテ一般ニ本病初期ニ於ケル例症ガ術後ノ遠隔成績ノ佳良ナルハ論ナキモ、著明ナル腹水ヲ伴ヒ、高度ナル肝臓硬變ヲ呈セル第三期ノ三例ニ於テスラ、尙良成績ヲ示セルヲ以テ、術前豫メ肝臓機能障礙ノ程度ヲ知リテ豫後ヲ判定スルト共ニ、晚期ニ於テモ可及的ニ脾臓剝出チ行ヒ、以テ病的脾臓ノ存在ニ伴フ肝臓病變ノ進行ヲ阻止スベキナリト信ズ。(自抄)

目次

第一章 緒言

第二章 症例及び其ノ血液所見

第三章 パンチ氏病ニ對スル脾臟剔出ノ影響

第一節 血液ノ變化ニ就テ

第一項 赤血球

一、赤血球數ノ消長

二、赤血球ノ性狀變化

三、赤血球抵抗力

第二項 血色素含有量

第三項 血色素指數

第四項 血小板

第五項 白血球

一、白血球數ノ増減

二、白血球ノ比率

第六項 血液凝固時間

第二節 全身狀態ノ恢復ニ就テ

第四章 脾臟剔出ノ効果並ビニ遠隔成績上ノ總括

第五章 結論

文獻

第一章 緒言

曩キニ一八九四年始メテ *Breit* ニヨリテ記載セラレシ所謂パンチ氏病ナルモノハ、溶血性黃疸ト相俟ツテ現今脾臟外科ニ於テ最重要ナル地位ヲ占ムル一疾患トハナレリ、而シテ其ノ本態ニ至リテハ尙不明ナル域ヲ脱セズト雖モ、本病ニ關スル業績陸續トシテ現ハレ殆ンド枚舉ニ遑アラザルノ感ナキニシモアラズ。爾來其ガ唯一ナル療法タル脾臟剔出術ニ於テモ、其ノ成績日ヲ逐フテ佳良トナリ、一九二六年 *Mayo* ノ如キハ、一一五例ノ脾性貧血ニ於テ其ノ死亡率僅ニ一一%ヲ示セルニ過ギズ。斯ク獨リ歐米ノミナラズ、本邦ニ於テモ好果ヲ收メシ個々ノ例症ノ發表セラレタルモノ又尠シトセズ。然レドモ本病第三期ニ於テ脾臟剔出ニ成功シテ治癒ニ赴カシメ、特ニ、術後長期ニ亘リ恢復狀態ヲ檢シテ轉歸ヲ詳カニシ、之ガ遠隔成績上ニ及ベル記載ニ至リテハ余ノ寡聞未ダ多シト云フヲ得ズ。茲ニ於テ余ハ臨床的並ビニ組織的ニ明ニパンチ氏病ト診斷セラレ、且脾臟剔出ヲ施行セル七例ニ遭遇シ、中六例ニ於テ效果ヲ得、尙、之等例症ノ手術前後ニ於ケル血液所見及ビ全身狀態ノ變化ヲ比較檢索シ、其ノ遠隔成績ヲ知り得タルヲ以テ茲ニ資料ヲ補シ併セテ諸賢ノ批判ヲ乞ハントス。

因ニ本編要旨ハ昭和二年四月日本外科學會ニ於テ發表シタルモノニシテ、更ニ追補ヲ加ヘシモノナリ。

第二章 症例及び其ノ血液所見

第一例 弓削某。二十三歳、男、商。

入院。大正九年六月廿日、退院。同年七月廿三日。

既往症。家族史ニ特記スベキ事ナキモ、患者生來比較的虛弱ニシテ貧血性ナリ。十三歳ノ折腎臓炎ニ罹リ、顔面及ビ下肢ニ浮腫ヲ生セルモ數週後治癒ス。更ニ十六歳ノ時脚氣ヲ病ミ、下肢ノ浮腫、知覺鈍麻ノ外、惡心、嘔吐、及ビ、下痢ヲ來シタルモ暫時ニシテ全快ス。

現病歴。大正八年八月末頃ヨリ全身疲勞感、盜汗、兩側肩胛部緊張、及ビ、左側季肋緣、並ビニ背部ノ鈍痛ヲ訴ヘ、特ニ運動時ニ甚シカリシガ、咳嗽、咯痰等ナシ。九月ニ至リ食後間モナク噁氣ト共ニ拇指頭大ノ黑褐色凝血塊ヲ混セル食物殘渣ヲ吐出セリ。其ノ後二回同様ノモノヲ吐出セリト云フ。十月末ヨリ兩側下腿ニ浮腫ヲ認メ、輕度ノ知覺鈍麻、呼吸速迫、及

ビ、心悸亢進アリシモ皮膚ノ蒼白ハ特ニ増惡セズ。然レドモ幼時ヨリ存セシ腹部膨滿ハ、當時特ニ著明ニナリシト。

現在症。体格中等、營養稍々不良ニシテ顔貌無力、全身皮膚ハ稍々高度ニ蒼白ニシテ亞黃疸色ヲ呈シ、結膜、特ニ軟口蓋ノ淡黃着色ヲ見ル。

胸部内臓器ニ著變ヲ認メザルモ、貧血性心雜音ヲ聞ク。熱發ハ輕度ニテ、一日數行ノ下痢ヲ來スコトアルモ、便ニハ蟲卵潛出血ナシ。尿量ニハ變化ナキモ尿中ウロビリノゲン陽性ナリ。下肢ニ輕度ノ浮腫ヲ認メル外、齒齦出血、鼻血、及ビ、表在性淋巴腺、扁桃腺等ノ腫脹ヲ飲キ、ワ氏反應陰性ナリ。

腹部所見。一般ニ膨滿シ、特ニ上腹部ニ著明ナルモ、靜脈怒張ヲ見

ズ。左季肋一部ニ肋骨弓ヨリ四橫指徑ニ互リ、抵抗アル濁音界アリ、周圍トノ關係上脾腫ナルヲ知ル。壓痛ナク、肝臟濁音界ニ變化ヲ缺キ、腹水ヲ認メズ。

手術。大正九年六月廿三日、パンチ氏病診斷ノ下ニ脾臟剔出ヲ行フ。脾腫ハ橫隔膜ト輕度ニ癒着シ、肝臟ハ暗赤色、表面粗ニシテ、中等度ノ硬變ヲ認メタリ。剔出セル脾腫ハ四〇〇瓦、 $16 \times 12 \times 4.5$ 厘米ノ徑ヲ有シ、組織的ニ明ニパンチ氏脾ノ變化ヲ呈シ、本例ハ第二期ニ屬スルヲ至當トス。

術後ノ經過。甚ダ佳良ニシテ化膿セズ、三十日後全治退院シ、其ノ後異常ヲ認メズ。七年一ヶ月七日(七月現在)尙健存ス。

第一表

第一例。弓削多血液所見
23/VI, 1920. 脾臟剔出

檢 査 年 月 日	21/V 1920	14/VII 1920	10/II 1927	9/III 1927
術 前 後 日 數	術前	21日後	2422日	2248日
血 色 素 量	48	74	52	52
血 色 素 指 數	0.88	0.97	0.54	0.54
赤 血 球	267 ^万	380	475	473
白 血 球	3800	6700	9060	7440
血 小 板				21.8 ^万
中 性 多 型 核	69.0		56.8	52.3
淋 巴 球	17.5		15.9	22.6
大單核及移行型	5.7		22.6	16.6
エオザン嗜好性	7.3		4.3	7.9
肥 胖 細 胞	0.6		0.4	0.6
骨 髓 細 胞	0		0	0
有 核 赤 血 球	—		—	—
アノリチトーゼ	+		—	—
ホイキロチトーゼ	+		—	—
凝 血 時 間			4-10	4-9
赤 血 球 抵 抗 力				0.26-0.40

第二例 石井某。三十五歳、男、無職

入院。大正十二年七月十六日、退院。同年七月廿五日。

既往症及家族史。特記スベキ事項ナシ。

現病歴。大正八年二月全身貧血、腹部膨滿、及ビ、緊満ノ感ヲ訴ヘタル當時、脾腫ノ診斷ヲ下サレ、其ノ後大正十年十一月感冒ニ罹リタル際、

腹部ニ人頭大ノ腫瘤ヲ認ム。下縁ハ左側乳房下十釐ニ及ビ、内ハ線正上中線ヲ越ユルコト約二釐ナリ。濁音ヲ呈スル此ノ部ニ壓痛ナク又腹水ヲ認メズ。

手術。大正十二年七月廿一日、バンチ氏病診斷ノ下ニ脾臓剔出ヲ行フ

第二表

第二例・石井血液所見

21/VII, 1923. 脾臓剔出

検査年月日	15/VII 1923
術前後日數	術前
血色素量	76
血色素指數	0.95
赤血球	396万
白血球	5200
中性多型核	70.0
淋巴球	2.00
大單核及移行型	2.6
エオザン嗜好性	4.0
肥胖細胞	0.6
骨髓細胞	0
有核赤血球	—
アニソチトーゼ	+
ボイキロチトーゼ	+

肝臓ハ暗赤色ニシテ表面粗、中等度ノ硬變ヲ呈ス。脾尾トカナリ癒着セル脾腫ハ大サ一二五〇瓦、21×19×「釐」ヲ算シ、組織的ニバンチ氏脾ノ所見ニ一致シ、本例モ第二期ニ該當ス。

術後ノ經過。不良ニシテ術後二日ニテ手術後ノショックノ爲ニ死亡セリ。

第三例 佐藤某。四十歳、女、農

入院。大正十二年九月十三日、退院。同年十月十

五日。

既往症及家族史。特記スベキ事ナシ。

現病歴。大正十一年末ニ全身貧血ヲ認メ、顔面及ビ下肢ノ浮腫ヲ來セルモ何等醫療ヲ受ケザリシニ、十二年四月頃腹部腫瘤ヲ認メ、翌五月頃ヨリ胃腸障礙ヲ來シ、主トシテ胃部疼痛、全身倦怠ヲ訴ヘ、約一ヶ月治療ヲ受ク。七月頃ヨリ十二指腸蟲病ニ罹リ約二ヶ月加療後、全身狀態ハ昨年末ニ比シ佳良トナリシト云フ。

現在症。体格中等、營養稍々佳良ナルモ、顔貌稍々無力、全身皮膚ハ蒼白ニシテ亞黃疸色ヲ呈シ、結膜及ビ軟口蓋ハ稍々著明ナル黃色ヲ帶ベリ而シテ輕度ノ熱發ヲ伴ヒタルモ、食慾不振、下痢ヲ來サズ。又、尿量ニ變

吐血シタルモ醫療ニヨリ全治ス。大正十二年六月中旬勞働後感冒ニ罹リ呼吸速迫アリ、特ニ四年以來腹部膨滿、及ビ、緊満ノ感、食慾不振、疲勞ノ感全ク消失セズ、更ニ一日數行ノ下痢アルヲ以テ内科ニ入院シ、後外科ニ轉ズ。

現在症。体格中等、營養稍々不良ニシテ顔貌無力、全身皮膚蒼白、且、汚穢ナル亞黃疸色ヲ呈シ、結膜特ニ軟口蓋ハ淡黃褐色セリ。胸部内臓器ニ變化ナキモ食慾不振、一日數行ノ下痢アリテ便ニ著明ナル潜出血及ビ十二指腸蟲卵ヲ證明ス。尿量ニハ變化ナキモ、尿中ウロビリリン及ビウロビリノーゲン陽性ナリ。齒齦出血、衄血等ナク、淋巴腺及ビ扁桃腺ノ腫脹ヲ飲キ、又下肢ノ浮腫ヲ見ズ、又ワ氏反應陰性ナリ。

腹部所見。一般ニ膨滿シ緊張セルモ、肝臓ノ大サ略々尋常ナリ。右側上

第三表

第三例。佐藤血液所見
21/IX, 1923. 脾臓剔出

検査年月日	23/VIII 1923	30. VIII	16 IX
術前後日數			術前
血色素量	46		
血色素指數	0.75		
赤血球	306万		324
白血球	2220		4800
中性多型核	66.0	74.0	
淋巴球	17.0	18.7	
大單核及移行型	10.0	4.3	
エオザン嗜好性	7.0	3.0	
肥腫細胞	0	0	
骨髓細胞	0	0	
有核赤血球	—	—	
アニソチトーゼ	+	+	
ボイキロチトーゼ	+	+	

其ノ後何等障礙ヲ來サズ。三年十ヶ月九日後今尙健在セリ。

第四例。秋山某。十八歳、男、農、

入院。大正十二年十月十五日。退院、同年十二月十三日。

既往症及家族史。特記事項ナシ。

現病歴。大正七年六月生梅ヲ食セシ後、甚シク胃腸ヲ害シ二週後輕快セリ。翌年初ヨリ下痢ニ苦ミタレバ醫藥ヲ乞ヒシニ、脾腫ノ存スルヲ告ゲラル。サレド其ノ後二年間ハ特ニ異常ヲ呈セザリシモ、屢々疲勞ノ爲休養セリ。爾來依然トシテ疲勞感アリテ勞働シ得ザリキ、本年七月廿三日氷ヲ擲リシ後、一週日水様血便持續シ、腹痛ノ緩解ト共ニ恢復シタルモ腹部ハ次第ニ膨滿ノ度著明トナリタレバ内科ヲ訪レ、パンチ氏病ノ診斷ヲ受ケ入院中腹水甚シク八月十三日ヨリ十月末マデニ、九回ニ亘リ腹腔穿刺ヲ行ヒ毎回三千乃至五千

ノ腹水ヲ排除シ居タリ。

現在症。体格虛弱、營養不良ニテ、顔貌無力性ナリ。全身皮膚ハ蒼白ニシテ亞黃疸色ヲ呈シ、結膜特ニ軟口蓋ハ淡黃褐色ヲ示セリ。胸部内臓器ニ著變ナキモ輕度ノ熱發ヲ來シ、食慾不振アリ。便通ハ一日數行ノ下痢アルモ、蟲卵潛出血ヲ見ズ。尿量減少稍々著明ニシテ、尿中ウロビリリン及ビウロビリノーゲン陽性ナリ。其他出血性傾向、腺腫脹、及ビ、下肢ノ浮腫等認メラレズ。ワ氏反應(±)ナリ。

腹部所見。一般ニ極度ニ膨大シテ緊滿ノ度甚シク、肝臓ハ稍々上方ニ壓セラレ左上部部ニ大ナル脾腫ヲ觸ル。下縁ハ左側乳線上臍ノ高サニ位シ、内縁ハ中線ヲ越ユルコト約一握ニ達シ且著明ナル腹水ヲ認ム。

手術。大正十二年十月廿二日。脾臓剔出ヲ行フ。周圍トノ癒着殆ド無ク

化ナシ。便ニハ蟲卵、潛出血ヲ認メザルモ、尿中ウロビリリン及ビウロビリノーゲンハ陽性ナリ。出血性傾向ナク淋巴腺、扁桃腺ノ腫脹ヲ示サザルモ下肢ニ輕度ノ浮腫ヲ認メ、其他ワ氏反應陰性ナリ。

腹部所見。一般ニ膨滿シ肝臓下縁ハ季肋緣ヨリ三横指徑下ニアリ。左上腹部ニ存スル脾腫ノ下界ハ左側乳線上臍下一横指徑下ニ達シ、内界ハ僅ニ中線ヲ越ユ。其他腹水ヲ認メズ。

手術。大正十二年九月廿一日。パンチ氏病診斷ノ下ニ脾臓剔出ヲ行フ。脾腫ハ僅カニ脾尾ト癒着セルヲ認メ、肝臓ハ稍肥大セル傾アルモ暗赤色ヲ呈シ、表面稍々粗ニシテ中等度ノ硬變ヲ示セリ。脾腫ハ七五〇瓦・10X14X85mmノ大サヲ有シ組織的ニフィブリアデニノ狀ヲ呈シ本例モ第二期ニ屬ス。

術後ノ經過。甚ダ良好ニシテ廿四日後第一期癒合ヲ以テ全治退院シ、

第四表
第四例. 秋山血液所見
22/X, 1923. 脾臓剔出

検査年月日	27/VIII 1923	8/X	18/X	21/X	14/XI
術前後日数				術前	23日後
血色素量	92	82		79	90
血色素指數	1.14	1.00		0.87	1.41
赤血球	403万	409	393	442	318
白血球	4400	3040		3100	6230
中性多型核	70.8	56.0	79.0		67.0
淋巴球	8.4	29.0	12.0		5.3
大單核及移行型	10.4	11.0	5.1		13.9
エオザン嗜好性	10.4	3.0	3.9		13.1
肥胖細胞	0	1.0	0		0.7
骨髓細胞	0	0	0		0
有核赤血球	—	—	—		—
アニソチトーゼ	+	+	+		+
ボイキロチトーゼ	+	+	+		+

肝臓ハ暗赤褐色ヲ呈シ硬ク、表面著シク粗ニシテ著明ナル萎縮性肝硬變ノ所見ヲ呈シ多量ノ腹水ヲ排除セリ。脾腫ノ大サ七〇〇瓦、 $15 \times 10 \times 6$ 厘米ニシテ組織的ニバンチ氏脾ニ一致ス。而シテ本例ハ第三期ニ該當ス。

術後ノ経過。甚ダ良好ニシテ廿二日後全治退院ス。其ノ後全ク健康ニ復シ、三年九月九日尙健在セリ。

第五例. 山崎某。二十四歳、男、農。

入院。大正十五年六月十九日。退院。同年九月三日。

原著 松谷 〓 バンチ氏病手術後ノ遺隔成績ニ就テ

既往症。家族史ニ記スベキ事ナク、只、九歳ノ折マテリアニ罹リタルモ、間モナク治癒シタリト云フ。
現病歴。大正十二年七月初旬ニ貧血、全身倦怠及ビ、食慾缺乏ヲ訴ヘ屢々高熱ヲ發シ、不眠アリタレバ醫療ヲ受ケシニ脾腫ノ存セルヲ告ゲラル。當時一日數行ノ軟便アリ血性粘液ヲ混ゼルモ、其ノ後翌年四月頃ニハ殆ンド苦痛ハ消退シテ健全トナリタリト。然ルニ大正十五年四月中旬、一日四―五回ノ下痢アリ。漸次赤褐色血性液狀ニ變セシカバ加療シ、次第ニ回數ヲ減ゼリ。然レドモ腹部膨滿甚シクアリテ、脾腫ハ徐々ニ増大セルモ、以來何等苦痛ナク、腹部膨滿及ビ緊満ノ感ハ輕度トナリ、食慾佳ク甚ダ輕快セリ。
現在症。体格中等、營養稍々佳良、顔貌無力、全身皮膚ハ蒼白ニシテ汚穢淡黃色ヲ呈シ、結膜及ビ軟口蓋ニモ淡黃着色ヲ認ム。胸部内臓器ニ變化ナク、尙屢々中等度ノ熱發ヲ認メ、食思佳良ナルモ一口二行ノ下痢アリ。便ニハ潜出血及ビ蟲卵ヲ認メズ。尿量減少著明ニシテ、尿中ウロビリノーゲン中等陽性。出血性傾向ナク腺腫脹及ビ下肢ノ浮腫ヲ證明セズ、ワ氏反應陰性ナリ。

腹部所見。中等度ノ膨滿ヲ呈シ、稍々緊張シ、特ニ左上腹部ニ著明ナル肝臓濁音界ニ變化ナシ。左上腹部ニ約人頭大ノ脾腫ヲ觸ル。而シテ内縁ニ二個ノ大ナル微痕ヲ示シ、下界ハ左側乳線上臍ノ高サニ位シ、内界ハ正中線ヲ越エルコト四厘米達ス。腹水ハ殆ンド證明シ得ラズ。

手術。大正十五年七月十五日、バンチ氏病診斷ノ下ニ脾臓剔出チ行フ。脾腫ハ全ク周圍トノ癒着ナク、且、鳩卵大ノ副脾存在ス。肝臓ハ暗赤色ヲ呈シ、表面粗ニシテ中等度ノ硬變ヲ呈ス。而シテ巨大ナル脾腫ハ二〇五〇瓦 $15 \times 10 \times 10$ 厘米ニシテ、組織的ニフィブ्रोアデニノ狀著明ニシテ本例ハ第二期ニ屬ス。

術後ノ経過。術後長ク熱發ヲ見タルモ、第一期癒合ヲ以テ五十三日後全治退院シ、其ノ後何等異常ナク、一年十八日尙健存ス。

第六例。長澤某。四十八歳、女、農、

第 五 表

第五例。山崎血液所見。12/VII, 1926. 脾臓取出

検査年月日	21/VI 1926	29/VII	7/VII	9/VII	16/VII	3/VIII	19/VIII	29/VIII	24/VIII	30/VIII 1926	8/II 1927	10/III 1927
術前後日数				術前	4日後	22日	38日	42日	46日	49日	211日	241日
血色素量	88	88	95	100	96	95	95	95	95	95	55	55
血色素指数	1.06	1.05	1.09	1.17	1.06	0.77	1.03	1.12	0.94	1.06	0.51	0.57
赤血球	411万	417	434	491	452	609	457	423	501	446	536	480
白血球	1430	1370	1380	1910	10130	8020	9240	6180	7720	8370	7240	8390
血小板												17.7万
中性多型核	74.2	67.4	63.6	59.0	72.0	61.5	52.8	35.4	41.6	47.0	55.3	66.2
淋巴球	11.2	12.0	2.5	9.6	7.2	7.3	8.5	37.4	27.5	28.0	25.0	15.0
大單核及移行型	8.1	10.3	17.4	22.2	15.0	18.8	15.6	9.4	12.6	9.7	13.5	15.6
エオザン嗜好性	6.3	10.3	13.5	8.6	5.8	12.1	23.1	17.6	18.0	15.2	5.5	3.1
肥 胖 細 胞	0.3	0	0	0.5	0	0.3	0	0.2	0.3	0.1	0.7	0.1
骨 髓 細 胞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
有 核 赤 血 球	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アニソチトーゼ	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-
ポイキロチトーゼ	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-
凝 血 時 間				8-18							5-12	7-15
赤血球抵抗力		0.38-0.40	0.28-0.40				0.24-0.38		0.24-0.38			0.24-0.40

入院。大正十五年十月廿三日。退院、同年十一月廿六日。
既往症及家族史。特記スベキ事ナシ。
現病歴。四年前ヨリ輕度ノ腹部膨滿ヲ來シタルモ何等苦痛ナク、二年
前ヨリ足部ノ冷感ヲ覺ヘ、本年三月頃ヨリ左上腹部ガ右側ニ比シ硬キヲ認
メタリ。七月ニ至リ全身貧血、疲勞感ヲ伴ヒ、其ノ後腹部膨滿及ビ緊張ノ

感ノ著明ニナルニ從ヒ漸次増悪シ、又下肢ニ輕度ノ浮腫ヲ來シ稍々衰弱セ
リ。此ノ間内科的ニ入院加療セリト云フ。
現在症。体格中等、營養稍々不良ニテ、顔貌無力性ナリ。全身皮膚ハ
蒼白、且亞黃疸色ヲ呈シ、結膜特ニ軟口蓋ハ淡黃褐色セリ。胸部内臓器ニ
著變ヲ見ザルモ、輕度ノ熱發ヲ認ム、食慾尋常ニシテ一日二行ノ軟便アリ

第 六 表

第六例。長澤血液所見
27/ X. 1926 脾臟剔出

檢 査 年 月 日	10/ IX 1926	15/ X	14/ XI	2 / XI	14/ XII	12/ I 1927	10/ III 1927
術 前 後 日 數		術前	18日後	29日	48日	77日	106日
血 色 素 量	35	60	55	60	73	60	53
血 色 素 指 數	0.64	0.71	0.61	0.74	0.74	0.89	0.61
赤 血 球	270万	417	448	400	489	375	430
白 血 球	3540	2640	9200	7920	10210	7870	9500
血 小 板							18.2万
中 性 多 型 核	73.0	71.5	63.6	52.3	57.3	60.7	67.7
淋 巴 球	23.0	19.0	16.4	30.8	22.7	29.4	19.2
大 單 核 及 移 行 型	1.0	5.0	10.0	9.6	15.8	5.9	9.2
エ オ ザ ン 嗜 好 性	3.0	4.0	9.7	7.0	3.9	3.4	3.3
肥 胖 細 胞	0	0.5	0.3	0.4	0.3	0.6	0.6
骨 髓 細 胞	0	0	0	0	0	0	0
有 核 赤 血 球	—	—	—	—	—	—	—
ア ニ ソ チ ト ー ゼ	+	+	+	+	—	—	—
ボ イ キ ロ チ ト ー ゼ	+	+	+	+	—	—	—
凝 血 時 間		8-16	5-10		5-10		5-9
赤 血 球 抵 抗 力		0.36-0.48					0.26-0.42

原 著
松 谷 Ⅱ
パンチ氏病手術後ノ遠隔成績ニ就テ

便中蟲卵及ビ潜出血ナシ。尿量ハ輕
度ノ減少アリ、尿中ウロビリリン及ビウ
ロビリノーゲン中等度陽性ナリ。尙下
肢ニ輕度ノ浮腫ヲ認ムル外出血性傾向
腺腫脹ナク又ワ氏反應陰性ナリ。
腹部所見。強度ニ膨滿シ、腹圍臍部
ニテ七七・五厘ヲ算ス、肝臟ハ尋常大
ニシテ著明ナル腹水存在ス。尙左上腹
部ニ濁音ヲ呈スル大ナル脾腫ハ、其ノ
下界、左側乳線上臍下二厘ニ達シ、内
界ハ中線ニ一致セリ。
手術。大正十五年十月廿七日。パ
ンチ氏病診斷ノ下ニ脾臟剔出ヲ行フ、
脾ハ胃ノ噴門ニ近ク大彎ニカナリ癒着
シ多量ノ腹水ヲ排除セリ。肝臟ハ暗赤
色ヲ呈シ、表面稍々粗ニシテ硬ク硬變
ノ度強シ。脾腫ハ六〇〇瓦・30×11×6
厘ノ大サヲ有シ、組織的ニパンチ氏脾
ニ一致ス。本例ハ第三期ニ相當セリ。
術後ノ經過。甚ダ良ク三十日後全
治退院シ、其ノ後九ヶ月四日ヲ經ルモ
何等異常ナシ。

第七表

第七例. 菅澤血液所見. 1927. 脾臓剔出

検査年月日	23/XI 1926	7/XII	7/XII アリ注 ドン射 レー後 ナcc二	11/I 1927	4/II	/II	12/II	14/III	19/IV	14/VI
術前後日数				術前	16日後	22日	24日	54日	90日	146日
血色素量	95	96		95	75	73	75	80	80	67
血色素指數	1.00	0.92		0.89	0.71		0.75	0.68	0.76	0.53
赤血球	474万	521		531	528		496	583	522	632
白血球	3900	3600	10800	4970	7160		7140	6640	6250	5520
血小板								27.7万	25.0	27.9
中性多型核	60.5	53.0	39.5	72.2	57.5	51.1	36.3	46.0	47.6	72.0
淋巴球	25.0	25.5	39.3	13.2	29.0	31.6	42.5	37.0	33.7	15.3
大單核及移行型	9.1	9.6	11.2	3.7	7.4	10.7	10.8	12.7	13.6	9.5
エオシン嗜好性	3.6	10.8	9.2	10.8	5.4	5.6	7.9	3.6	3.8	3.2
肥胖細胞	1.8	1.1	0.8	0.2	0.7	1.0	2.5	0.7	1.3	0
骨髓細胞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
有核赤血球	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アニソチトーゼ	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
ポイキロチトーゼ	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
凝血時間				7-16	6-13	6-15		6-15	4-10	4-10
赤血球抵抗力	0.38-0.52							0.28-0.42		0.20-0.32

原著 松谷 Ⅱ パンチ氏病手術後ノ遠隔成績ニ就テ

四八八 (六八)

第七例. 菅澤某. 二十一歳、男、農、

入院。昭和二年一月七日、退院。同年二月十二日。

既往症及家族史。特記スベキ事ナシ。

現病歴。大正十四年一月九日頃、二三日ニ亘リ一日十數回ノ下痢アリ、醫療ニヨリ輕快セルモ、後急劇ニ腹部膨滿ヲ認メタリ。而シテ左上腹部ノ腫瘍ハ約二ヶ年前ヨリ存在セルモ、全ク苦痛ナカリシカバ放置セルモノニシテ、大正十五年十月第二内科ヲ訪レ、パンチ氏病診斷ノ下ニ入院加療中ナリシガ、腹水著明トナル故、腹腔穿刺ヲ二回行ヒ、各々一三〇〇—二〇〇〇珎ヲ排除セリ。而シテ全身倦怠ハ多少存スルモ、食慾及ビ便通ニハ變化ナシト云フ。

現在症。体格稍々小ナルモ、營養稍々佳良ナリ。顔貌無力、全身ノ皮膚ハ貧血性ニシテ汚穢淡黃褐色ヲ呈シ、結膜及ビ軟口蓋ノ淡黃着色ヲ見ル。胸部内臓器ニ變化ナキモ輕度ノ熱發ヲ認ム。又胃腸障礙ナク便中蟲卵及ビ潜出血ヲ證明セザルモ、輕度ノ尿量減少存シ、尿中ウロビリリン及ビウロビリノーゲン中等度陽性ナリ。出血性傾向及ビ淋巴腺、扁桃腺ノ腫脹ナキモ、下肢ニ輕度ノ浮腫ヲ認ム。其他ワ氏反應陰性ナリ。

腹部所見。甚シク膨滿シ、緊張著明ナリ肝臓ハ略々尋常大ナルニ反シ、脾臓ハ著シク増大シ、下縁ハ左側乳線上、臍ノ高サヨリ一糎上方ニ位シ、内縁ハ中線ヲ越スコト三糎ナ

リ。其ノ他腹水ハ著明ニ存スルヲ認ム。

手術。昭和二年一月十九日、脾臓剔出ヲ行フ、殆ンド癒着ナキモ、小指頭大ノ副脾存シ、且多量ノ腹水ヲ認メタリ。肝臓ハ高度ナル萎縮性硬變ヲ示シ、暗褐色ニシテ硬ク、表面粗大、顆粒狀ヲ呈セリ。剔出セル脾腫ハセ〇〇瓦、 $19.5 \times 13.5 \times 8$ 糎ノ大サヲ有シ、組織的ニハフィブroadデニノ所

見著明ニシテ、本例モ第三期ニ該當ス。

尙肝臓ノ試験切除ニヨリ之ヲ鑑檢スルニ間質結締組織ノ増殖著明ナル外、靜脈ノ鬱滯著明ニシテ同様ニ第三期ニ相當セリ。

術後ノ經過。甚ダ佳良ニシテ第一期癒合ヲ以テ廿四日後全治退院シ、其ノ後六ヶ月十二日ヲ過グルモ何等障礙ナク、今尙健存セリ。

第三章 バンチ氏病ニ對スル脾臓剔出ノ影響

第一節 血液ノ變化ニ就テ

検査術式。血球計算ハトーマ、ツァイス氏血球計算板ヲ用ヒ、ギムザ氏液ニテ染色ス。血色素ハザリー氏血色素計、赤血球抵抗カハピアス、クラムバー氏法ニヨリ低張食鹽水ニテ檢シ、血小板ハフォニオ氏法ニ從フ。尙凝血時間測定ニハ佐藤式血液凝固測定器ヲ用ヒ、攝氏二五度ヲ標準トナセリ。

第一項 赤血球

一、赤血球數ノ消長

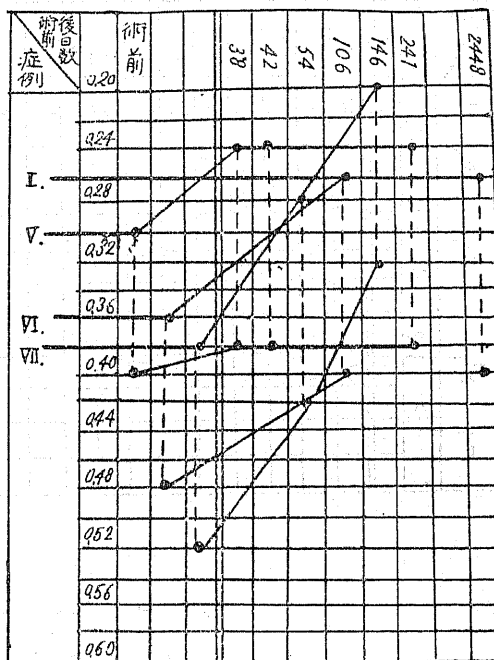
バンチ氏病脾腫剔出後ニ於テハ一般ニ術直後多小赤血球減少スルモ、早晚正常或ハ之ニ近キ數ニ復スルモノトセラル。而シテ術前既ニ正常數ニアルモノ或ハ多少減少セル多數ノ例ニ於テハ、何等變化ナキカ或ハ直ニ常態ニ恢復スト云フ。余ノ第六例ニ於テハ全ク之ニ一致スル所見ヲ呈スルモ Grosset-Schaub ノ認メタルガ如キ一過性ノ赤血球過多ヲ起セル第五例アリ。尙 Umber, Schupfer, Levison 等ノ示セル如ク、第七例ニ於テハ五ヶ月後尙六百萬ヲ算シテ一定度ノ持續性過多ヲ來シ概シテ一定セザルノ觀アリト雖モ、表ニ示スガ如ク一般ニ術直後一時減少スルモ一過性ニ上昇スル傾向ヲ有シ、二ヶ月後ニ於テハ略々正常ニ復スルヲ見ル。然レドモ術前ニ比スル時ハ稍々著明ノ増加ヲ示シ再ビ正常價以下ニ下降セザルモノノ如シ。

二、赤血球ノ性狀變化

術前凡テノ症例ニ認メラシ赤血球ノ不同及ビ多型ノ變化ハ、術後漸次輕減シ、一ヶ月後ニ於テハ略々正常ニ復スルヲ見ル。而シテ Biering-Egdahl, Levison ガ認メタル如キ有核赤血球ノ出現ヲ見ズ。

第九表

赤血球抵抗力



止ラズ、尙、持續的ニ正常乃至ハ其レ以上ノ數量ヲ示スヲ以テ、血色素指數ハ術後輕度ノ上昇ヲ認ムルノミニシテ、三ヶ月後ニ於テハ術前ニ比シ甚シク低下シ各例ハ略々同一ナル價〇・五〇・六ヲ示スニ至レリ。

第四項 血小板

血小板ハ數例ニ於テ單ニ術後檢セルノミナルモ、數ヶ月後ニ於テハ略々正常ニ復シ居ルヲ認メタリ。

第五項 白血球

一、白血球數ノ増減

白血球數ハバンチ氏脾剝出後ニ於テモ正常脾剝出ノ際ト略々同様ナル變動ヲ蒙ルコトハ既ニ認メラル、所ニシテ、初メ高度ナル白血球過多ヲ起スモ、後徐々ニ正常或ハ稍々多キ數ニ復スルモノナリ。時トシテ術直後屢々數萬ノ多キニ達スルコトアルモ、又、或期間、即チ、三乃至四週ヲ經テ三—四萬以上ノ多キニ昇ルアリ。之ニ反シテ術直後ニハ比較的輕度ノ増加、即チ、七千乃至一萬五千ニ止ルアリ。斯クノ多キ經過ノ何レヲ取ルモ、數ヶ月後ニ於テハ再び正常ニ復歸スルモノニシテ、一般ニ白血球減少ハ全ク消失スルナリ。

余ノ例ニ於テハ術前常ニ五千以下ノ著明ナル減少ヲ來セル各例ハ、術直後著明ナル反應性増加ヲ伴ヒタルハ勿論ナルベキモ、手術的侵襲ノ影響ヲ蒙ラザル二週以後ニ於テスラ、術前ニ比シ著明ナル増加ヲ示シ、數ヶ月乃至數年後ニ至ルモ再び術前ニ復歸セルモノナク、常ニ正常或ハ稍々高キ價ヲ示シ、先人ノ報告ト略々一致セル所見ヲ見タルモ、Ceri, Simpson, Armstrong, Biering-Egdahl 等ノ例ノ如ク數ヶ月後更ニ新シキ増加ヲ來シ、或ハ長ク過多ノ狀態ニ止マリシモノヲ認メザリシナリ。

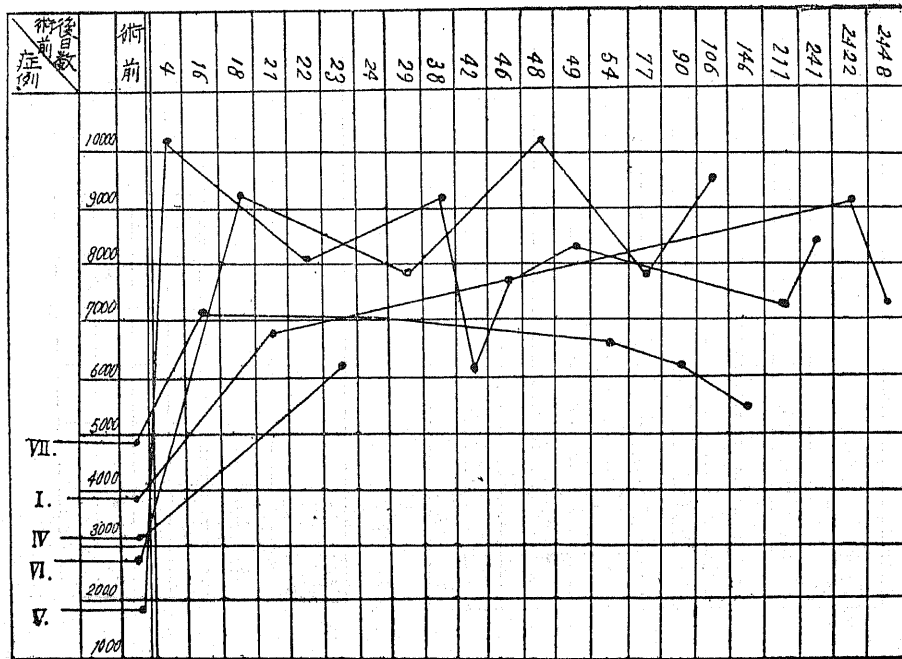
二、白血球ノ比率

原著 松谷 〓 バンチ氏病手術後ノ遠隔成績ニ就テ

Figure 1 is a line graph showing the relationship between the degree of disease (Y-axis) and the degree of treatment (X-axis). The Y-axis is labeled '病度' (Disease Degree) and ranges from 0.4 to 1.4. The X-axis is labeled '治療度' (Treatment Degree) and ranges from 0 to 244.8. Five lines are plotted, labeled I, II, III, IV, and V. Line I starts at 0.6 and increases to 1.4. Line II starts at 0.8 and increases to 1.2. Line III starts at 0.8 and increases to 1.0. Line IV starts at 0.8 and increases to 1.0. Line V starts at 0.8 and increases to 1.0.

第十二表

白血球ノ増減



淋巴球。前者トハ反對ニ術後漸次上昇スル傾向ヲ示シ、中性多型核白血球ノ最低率ヲ示ス時期ニ於テ最も高ク四〇%ヲ過グルニ至ルコトアリト雖、次第ニ再ビ減少シテ正常比ニ復セリ。

大單核及移行型細胞。術後一般ニ稍々増加スルモ三乃至六週ニ於テ最も甚シク屢々一八%ニ達スルコトアルモ、數ヶ月後ハ略々常態ニ復ス。然レドモ時トシテ長ク高率ヲ示セルアリ。

エオチン嗜好性細胞。前者ト略々同一ノ經過ヲ取リ三乃至六週ニ於テ最高ヲ示シ屢々二〇%ノ多キニ達ス。然レドモ漸次下降シテ數ヶ月後ニハ五%内外トナレリ。

肥胖細胞。術前後ニ於テ殆ンド差異ヲ認メズ。其他骨髓性細胞ノ出現ヲ見ザリシナリ。

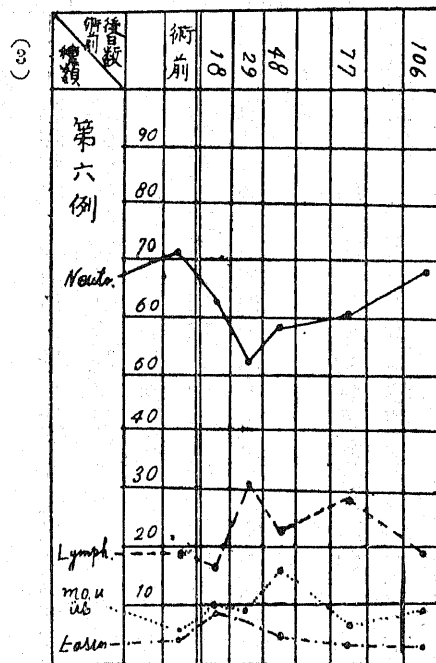
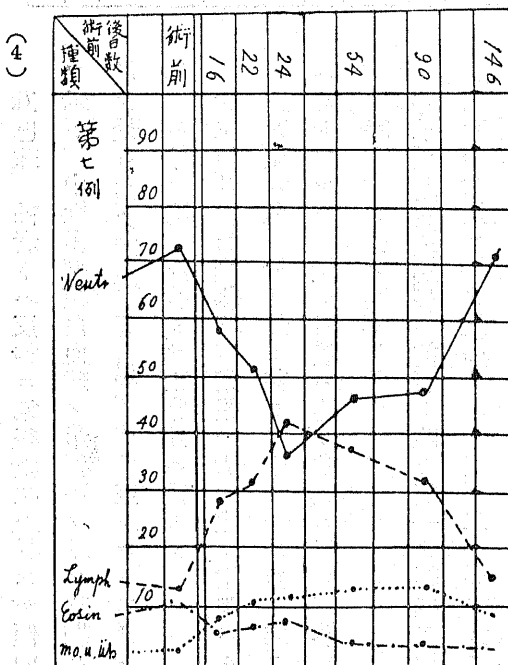
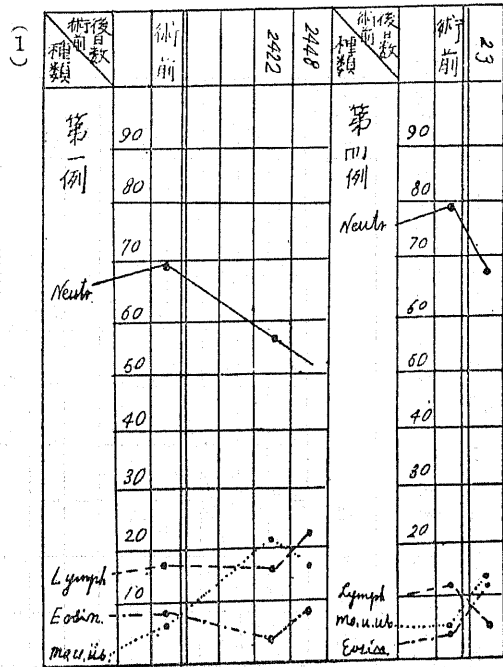
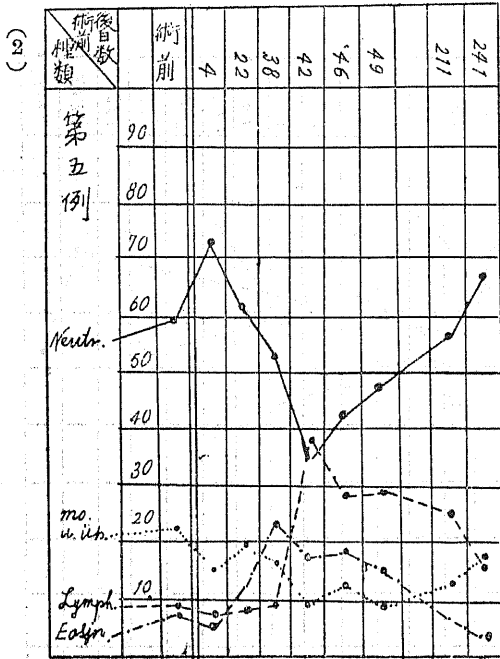
第六項 血液凝固時間

術前稍々著明ノ遲延ヲ來セル凝血時間ニ就テハ二週後ニ於テハ速進ヲ示シ次第ニ正常ニ復スルヲ見タリ。

第二節 全身狀態ノ恢復ニ就テ

發熱。正常脾剝出ノ際ニハ認メラレザルモバンチ氏脾剝出後ニハ屢々高熱ヲ發シ、二―三週持續シタル後次第ニ下降スルコトハ Banti, Jaffé, Harris-Herzog, Herzog, A. Müller 等ノ數例ニ於テ見ラレタル所ニシテ、通常三九度、稀ニハ三九・六度ニ達スルコトアリテ、之ハ或ル種ノ中毒性現象ナリト解セラル。而シテ余ノ第三例ヨリ第七例ノ五例ニ

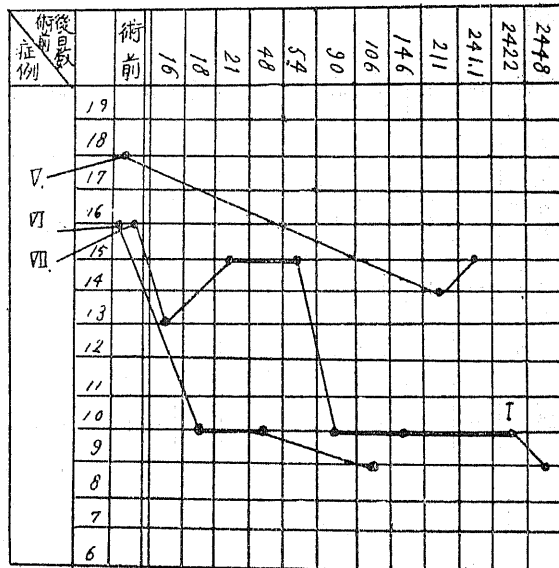
第十三表
白血球ノ比率



原著 松谷 〓 パンチ氏病手術後ノ遠隔成績ニ就テ

第十四表

血液凝固時間



於テ之ヲ見ルニ、第六例ハ肺炎、第七例ハ氣管枝炎ヲ併發シタル外、何レモ第一期癒合ヲ以テ切創ノ治癒セルニ係ラズ第三例ニ於テ最高三八・八度ヲ示セルニ比シ、他ハ凡テ三九度乃至三九・八度ノ高熱ヲ發シ、最短十三日（第七例）ヨリ最長三十七日（第五例）ニ至ル間熱發ヲ見タリ。

貧血及ビ黃疸。皮膚及ビ粘膜ノ蒼白ハ殆ンド凡テノ例症ニ見ラレタル所ナルモ、術後二三週ニシテ何レモ恢復シ、其ノ他貧血ニ伴フ症狀全ク去ルニ至レリ。尙皮膚ノ亞黃疸色ヲ呈シ汚穢ナル着色ヲ來スコトハ本病ノ進行セル病期ニハ殆ンド毎常認メラル、所ニシテ、余ノ例ニ於テハ凡テ術後一ヶ月ニテハ稍々輕度トナルノミニシテ結膜及ビ軟口蓋ハ尙淡黃着色ヲ示シ、而シテ更

ニ數ヶ月乃至數年後ニ於テハ皮膚ハ健康人ト差ナク、結膜モ甚シク輕度トナルモ、軟口蓋ニハ尙淡黃着色ヲ殘存セリ。腹水、腹部膨滿及緊滿ノ感。特ニ腹水ハ前述ノ如ク第三期ニ屬スル三例ニ於テ著明ニ認メタルモ、凡テ術後全ク消退シ數ヶ月乃至數年ヲ經ルモ未ダ曾テ再發ヲ來シタル例ヲ認メズ。

營養。術前例症ニヨリテ差アルモ、術後四—五週ノ退院當時ニハ大差ナシト雖モ、漸次恢復シテ發病前ニ歸ルモノノ如シ。

顔貌。何レモ無力性ニシテ沈鬱ナル外觀ヲ有スルモ、術後既ニ三—四週ニシテ頰部口唇ハ紅色ヲ帶ビテ活性ヲ呈シ數ヶ月後ニ於テハ殆ンド健康人ト差異ヲ認ムルコト能ハズ。

胃腸障礙、疲憊感及下肢浮腫。食思不振、一日數行ノ下痢、其ノ他ノ症狀ハ凡テ術後二三週ニシテ全ク消退セリ。出血性傾向。凡テ著明ナル齒齦出血、及ビ、衄血ハ認メザリシモ、二例ニ於テ吐血アリ。而シテ第一例ニ於テハ術

第十五表

尿ノ變化 (1)

症例	I			II			III			IV			V			VI			VII		
術前後	前	30	2448	前			前	34		前	33		前	41	241	前	30	106	前	24	146
ビリルビン	-	-	-	-			-	-		-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウロビン	+	+	+	+			+	+		+	+		+	+	+	+	+	+	+	+	+
ウロビリノーゲン	+	+	+	+			+	+		+	+		+	+	+	+	+	+	+	+	+
蛋白質	-	-	-	-			-	-		-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-
糖	-	-	-	-			-	-		-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-

原著 松谷 〓 パンチ氏病手術後ノ遠隔成績ニ就テ

尿ノ變化 (2)

症 例	I			V			VI			VII		
術 前 後	前		2448	前	39	241	前		106	前		53
試 験 前 糖 反 應			-	-	-	-	-		-			-
2時間後			-	+	+	+	+		+			+
4 "			+	+	+	+	+		+			+
6 "			-	+	-	+	±		-			+
8 "			-	-	-	-	-		-			+
20 "												±
24 "												-

四九六 (七六)

後約二ケ年間、時トシテ輕度ノ吐血ヲ來シタル外、第六例ニ於テハ術後第八日ヨリ十一日間血性粘液便ヲ認メタリ。造血臟器ノ變化。數ケ月乃至數年後ニ至ルモ一例モ表在淋巴腺及扁桃腺ノ腫脹ヲ來シタルモノナク、全ク他ノ造血臟器ニ變兆ヲ認メザルナリ。

尿ノ變化。尿量減少ハ主トシテ第三期ノ例ニ見ラレ、一日三〇〇—四〇〇㏞ニ減少セルモノアリシガ、何レモ術後間モナク尋常トナリタリ。而シテ尿中ウロビリン及ビウロビリノーゲンハ每常弱或ハ中等度陽性ナル成績ヲ示シ、而カモ之等ハ術後數ケ月乃至數年ニ亘ルモ殆ンド術例同様ニ證明シ得ラレ、全ク消失セルヲ認メズ。肝臟果糖耐力試驗。四例ニ於テ單ニ尿中ノ糖出現ヲ檢セルノミナルモ長期間陽性ニシテ術前ト大差ナシ。

第四章 脾臟剔出ノ效果並ニ遠隔成績上ノ總括

本症ニ對スル療法トシテ脾腫ノ剔出ガ最モ卓絶シ、且、推獎スベキモノナリトハ Bauri ノ唱導セル所ニシテ、其ノ效果ノ偉大ナル全ク他ノ保存的療法ノ比ニアラズ。而カモ初期及ビ第二期ニ於テハ殆ンド永久治癒ヲ收メ得ルモノト信ゼラル、ト雖モ、術後二ケ年以上ニ亘リ其ノ轉歸ヲ明ニシ、特ニ遠隔成績上永續治癒ヲ營メルモノノ報告尠クシテ僅ニ Székely ノ二年、Popoff ノ四年、Brandberg ノ三乃至五年、Michei ノ八年、Bauri ノ七乃至十四年、Herfarth ノ八乃至十三年、鵜澤ノ十七年等ノ數例ヲ聞クノミナリ。之ニ反シテ肝臟機能ノ著シク障礙セラレ腹水著明ナル第三期ニ於テハ一般ニ豫後甚シク不良ナリトセラル。然レドモ單ニ脾剔出乃至ハ之ニ兼ネタルマ氏手術ヲ行ヒ、尙屢々著効ヲ奏セルハ、既ニ Levison, Thiel, Caro-Jaffé, Thöle, Sweetser, Cassarini, Chaher, Abertin-Gardère, Bergmann, 鵜澤、高槻等ノ各一例ニ於テ認メラレタル所ニシテ、Abertin-Gardère ノ如キハ術後十五年ノ長キニ亘リ良好ナル經過ヲ取リシヲ見タリ。

余ノ例ニ於テ總括的ニ觀察スルニ、脾臟剔出ヲ行ヘル七例ハ凡テバンチ、ゼナトール症候群ヲ具ヘ、一例モワ氏反應ノ陽性ナルモノナク、且、剔出脾臟ノ組織學的檢索上、何レモフィブroadeningニ呈シ、全クバンチ氏脾ニ一致スル所見ヲ認メタルヲ以テ、明カニバンチ氏病ノ診斷ヲ下シ得タル例症ナリ。

第十六表ニ示ス如ク、從來ノ時期的區分法ニ從ヘバ第二期ノ終リニ屬スルモノ四例、第三期ニ該當スルモノ三例ナ

第 十 六 表

症 例	年 齡	性	發 病	術 日	剔出脾臟ノ大サ		肝硬變 ノ程度	術後 轉歸	病 期	術後生存日數 (七月現在)
I	2)	男	1年前 ³³	VI'1920	400	16×12×4.2	卅	佳良	II	7年1月7日
II	35	男	5年''	21/VII'23	1250	21×19×7	卅	死亡	II	2日
III	40	女	1年''	21/IX'23	750	19×14×8.5	卅	佳良	II	3年10月9日
IV	18	男	4年''	22/IX'23	700	16×13×6	卅	佳良	III	3年9月9日
V	21	男	4年''	12/VII'26	2050	25×18×10	卅	佳良	II	1年 19日
VI	48	女	4年''	27/X'26	600	20×11×6	卅	佳良	III	9月4日
VII	21	男	5年''	19/I'27	700	19.5×13.5×8	卅	佳良	III	6月12日

原 著 松谷 II バンチ氏病手術後ノ遠隔成績ニ就テ

四九八 (七八)

肝硬變ノ度ハ何レモ腹水ノ存否ト相俟ツテ中等度乃至高度ナルモノアリシガ、特ニ第七例ニ於テハ著明ナル變化ヲ呈セリ。

而シテ脾臟剔出後、唯第二例ガ術後二日ニシテ肺栓塞ノ併發ニヨリ死亡シタル外、他ノ六例ハ經過全ク良好ニシテ術直後ノミナラズ、其ノ遠隔成績モ亦極メテ佳良ナリ。而シテ七月現在ニ於テ、其ノ生存日數ノ最モ長キハ七年一ヶ月七日ニシテ、短カキモ六ヶ月十二日ヲ算シ、第三期ノ例ニ於テモ既ニ三年九ヶ月九日ヲ經過セルアリ。

而シテ之等ノ各例症ハ術後反應トシテ數日乃至數週間高熱ヲ發スルコトアルモ、漸次平熱ニ降ルニ至リ、血液ノ變化ニ就テモ、赤血球ノ比較的增加、其ノ抵抗力増大、至乃ハ變型、變性等消失シ一方血色素量ノ漸次低下スルモ白血球數ハ常ニ増加シ、尙、其ノ百分率ニ於テモ次第ニ正常ニ近ヅキ、又、血液凝固力増進、血小板ノ常數ニ近似スル等血液所見ノ恢復スルト共ニ、全身狀態モ漸次良好トナリ、退院當時ノ三乃至五週後ニ於テハ營養ニハ大差ナキモ貧血症狀殆ンド消退シ、顏貌ハ蒼白ナラズシテ口唇及ビ頰部血色ヲ帶ビ活潑トナル、唯、皮膚ハ尙輕度ノ亞黃疸色ヲ呈シ、結膜特ニ軟口蓋ハ未ダ淡黃着色ヲ見ルモ、術前最モ苦痛トセル全身疲勞ノ感、下肢ノ浮腫輕度ノ熱發、食慾不振、下痢、腹部膨滿、及ビ、緊滿ノ感等

ノ自覺的症狀全ク去リ、他覺的ニモ腹水、尿量減少等ノ消失シテ再發ノ傾向ナク、外觀健康狀態ニ近ク活性ヲ呈セリ。
更ニ術後二ヶ月以降數年ヲ經過セルモ、自覺的ニハ苦痛全ク去リテ何等認ムベキ異常ナク、他覺的ニモ營養每常復舊シ、唯結膜特ニ軟口蓋ニ尙輕度ノ淡黃着色ヲ認ムルト雖モ皮膚ハ貧血ノ恢復ニヨル健康血色ニ依リテ全ク健康人ト識別シ得ラレザル程度トナリ、充分發病以前ノ職業ニ從事シ得、勞働スルモ障礙ヲ來サザルニ至レリ。

斯クシテ長期間ノ經過中、一例ダモ黃疸ノ増惡、腹水、及ビ鼓腸ノ再發セザルノミナラズ、且ツ他ノ造血臟器ニ何等異變ヲ發現セザリシコトハ特ニ注目スベキ事實ナリ。唯、遺存症候トシテ結膜、主トシテ軟口蓋ノ輕度ナル淡黃着色ニ加フルニ、數ヶ月乃至數年ニ亘ルモ尿中ウロビリリン及ビウロビリノーゲンハ每常中等度ニ證明セラレ、肝臟果糖耐力試驗モ亦陽性ナルモノ多キモ、凝血力増進、黃疸ノ輕減及ビ腹水ノ再發等ノ事實ヨリ推定スルニ、既ニ基質的ニ變化ヲ蒙ムレル肝臟ニ對シ、其ノ機能的關係ニ於テハ幾分恢復ノ兆ヲ示シ少クトモ増惡セザルニ止マルト雖モ、脾臓出ガ肝臟機能ヲ漸次復舊シ其ノ基質的再生ヲ完成スル効果ヲ有セザルコトハ止ムヲ得ザル事ナリト云フベシ。

斯カルガ故ニ、肝臟機能障礙ノ著明ナルモ未ダ生命ヲ奪取スルニ至ラザル時期ニ於テ、病的脾臓ノ存在スルガ爲メ益々肝臟ノ變化ヲ増惡セシメ、從ツテ其ノ機能ヲ再ビ起ツ能ハザラシムルハ吾人ノ採ラザル所ニシテ、本病第三期ニ於テモ脾臓出乃至ハ兼ネテタルマ氏手術ヲ行ヒ、尙良ク治癒ニ赴カシメタル前述ノ數例アルノミナラズ Mayo モ晚期ニ於テハ死亡率最高キモ尙治癒ニ至レルモノ尠カラズト云ヘル如ク、又、余ノ第三期ニ屬スル三例ニ於テモ、術後長時日全ク健康ヲ保チ得タル事實ヨリ、全身狀態ノ許ス限リ脾臓剔出ヲ行ヒ、以テ肝臟機能障礙ノ増惡ヲ防止スルハ最も適切ナル處置ナリト信ズ。

第五章 結 論

一、パンチ氏病七例ニ於テ脾臓剔出ヲ行ヒ、中一例(第二期)ハ術後二日ニテ死亡セルモ、他ノ六例ハ尙健存シ長キハ術後七年一ヶ月、短キハ六ヶ月ヲ經過ス、而シテ三例ハ第二期ノ終リ他ノ三例ハ第三期ニ屬セリ。

二、術後全身狀態ハ凡テ恢復シ、營養モ發病以前ノ健康狀態トナリ、自覺的ニハ何等障礙ナク充分勞働シ得、他覺的ニハ一例モ腹水鼓腸ノ再發セルモノナク、又、他ノ造血臟器ニ異常ヲ認メズ。唯皮膚結膜特ニ軟口蓋ノ淡黃着色ハ、

程度ハ減少セルモ全ク消失スルニ至ラズ。然レドモ貧血ノ恢復ニ伴フ健康血色ニ依リ殆ンド識別シ得ズ。

三、血液所見ニ就テハ、赤血球數ハ術後稍々低下スルモ直ニ一過性ニ上昇シ、約二ヶ月後ハ正常或ハ稍々高キ價ニ止マルニ反シ、血色素量ハ輕度ニ上昇スルノミニシテ略々二ヶ月後ニハ漸次低下シ始メ、其ノ後ハ術前ニ比シ毎常減少セルモ略々一定ノ状態ニ止ツテ増減ナキニ至ル。故ニ血色素指數ハ漸次低下セリ。白血球數ハ術直後著明ナル反應性増加アルモ、二週後ニハ略々常態ニ復シ以後一定トナレリ。而シテ其ノ百分率、就中、中性多型多核白血球ト淋巴球トノ關係ニ就テハ、前者ハ術後一過性ニ高率トナルモ六週迄ハ低キヲ示シ、之ニ反シテ淋巴球ハ此ノ時期ニ最も高キヲ來スモ、其ノ後ハ互ニ生理的比率ニ近接シ、術後十數週後ニハ略々常態ノ比トナル。大單核及ビ移行型細胞、エオチン嗜好性細胞ハ共ニ術後三乃至六週ニ最高率ヲ示スモ漸次正常ニ復歸シ、肥胖細胞ニハ殆ンド變化ヲ來サズ、次ニ血小板ハ術後常態トナリ赤血球ノ變性及ビ變型消失シ、其ノ抵抗力ヲ増大ス。更ニ血液凝固時間ハ術後三乃至六週ニ於テハ略々正常ニ復セリ。

四、肝臟果糖耐力試験ハ術後長期間陽性ナルモノ多ク、又尿中ウロビリリン及ビウロビリノーゲンノ長時日尙證明シ得タルハ未ダ肝臟機能ノ正常ニ復歸セザルコトヲ示スモノニシテ、既ニ基質ニ深ク變化セル肝臟ニ對シテハ術ナシト雖モ術後腹水鼓腸ノ再發ナク、黄疸ノ増惡セザルコト、及ビ、出血性傾向ヲ缺如スル等ノ事實ヨリ肝臟病變ノ度ハ更ニ増惡セザルモノノ如シ。

五、一般ニ本病初期ニ於ケル例症ガ術後ノ遠隔成績ノ佳良ナルハ論ナキモ、著明ナル腹水ヲ伴ヒ高度ナル肝硬變ヲ呈セル第三期ノ三例ニ於テスラ、尙、良成績ヲ示セルヲ以テ、術前豫メ肝臟機能障礙ノ程度ヲ知リテ豫後ヲ判定スルト共ニ、晚期ニ於テモ可及的ニ脾臟剔出ヲ行ヒ以テ病的脾臟ノ存在ニ依ル肝臟病變ノ進行ヲ阻止スベキナリ。

(昭和二七、三二)

稿ヲ終ルニ臨ミテ不斷ノ御指導ト御校閲トヲ賜ハリタル恩師 瀨尾教授ニ深謝スルモノナリ。

文 獻

- 1) Albu, Deut. med. Wochenschr. Nr. 19-20, 1904.
- 2) Bergmann, Bruns Beitr. Bd. 187, 1926.
- 3) Hunt, Ziegler's Beitr. Bd. 87, 1889.
- 4) Caro, Deut. med. Wochenschr. Nr. 29, 1907.
- 5) Goebel, Münch. med. Wochenschr. Nr. 15, 1913.
- 6)

- Grosser, Münch. med. Wochenschr. Nr. 76, 1913. 7) **Grützner**, Bruns's Beitr. Bd. 85, 1913. 8) **Herfarth**, Bruns's Beitr. Bd. 128, 1923. 9) **Hirschfeld**, Die Krankheiten der Milz. 1922. 10) **Jaffe**, Deut. Zeitschr. f. Chirurg. Bd. 84, 1906. 11) **Levison**, Annals of Surg. Vol. 38, 1903. 12) **Kast**, Wien. med. Wochenschr. Nr. 7, 1903. 13) **Morehand**, Münch. med. Wochenschr. Nr. 11, 1903. 14) **Müller**, Münch. med. Wochenschr. Nr. 45, 1905. 15) **Mayo**, Jour. of Americ. med. Assoc. Vol. 87, 1926. 16) **Mayo**, Jour. of Amer. med. Assoc. Vol. 77, 1921. 17) **Moyulhan**, Brit. med. Jour. No. 3134, 1921. 18) **Nager u. Bümmelin**, Bruns's Beitr. Bd. 56, 1907. 19) **Pauleck**, Wien. med. Wochenschr. Nr. 46, 1908. 20) **Senator**, Berl. kl. Wochenschr. Nr. 44, 1901. 21) **Sweiser**, Surg. Gynecol. & Obstet. Vol. 33, 1921. 22) **Schittenhelm**, Die Krankheiten d. Brutes u. d. blutbildenden Organe. 1925. 23) **Thiel**, Deut. Zeitschr. f. Chirurg. Bd. 81, 1906. 24) **Rhôte**, Deut. med. Wochenschr. Nr. 40, 1907. 25) **Unher**, Münch. med. Wochenschr. Nr. 17, 1912. 26) **Ziegler**, Ergebnis. d. Chirurg. u. Orthopäid. Bd. 8, 1914. 27) **松井**, 日本病理學會誌 第5卷 大正5年 28) **三田村**, 日本病理學會誌 第5卷 大正5年 29) **三田村**, 日本病理學會誌 第6卷 大正6年 30) **西川**, 日新醫學 第6年 大正5年 31) **中村**, 日新醫學 第8年 大正7年 32) **佐藤**, 醫事新聞 第1024號 大正8年 33) **伊藤**, 東京醫事新誌 第2056號 大正7年 34) **飯塚**, 京都醫學會誌 第19卷 大正11年 35) **三浦**, 實驗醫報 第11年 大正14年 36) **鶴澤**, 日本外科學會誌 第27回 大正15年 37) **菅野**, 日本外科學會誌 第27回 昭和2年 38) **木下**, グレンツグゼート 第1年 昭和2年 39) **大里**, グレンツグゼート 第1年 昭和2年 40) **高槻**, 治療及處方 第7年 大正15年